

## りびんぐらいぶず 平成二十一(二〇〇九)年十一月第二号

### 浄土にてかならずまぢまゐらせ候べし

弥陀の本願と申すは、名号をとなへんものをば極楽へ迎へんと誓はせたまひたるを、ふかく信じてとなふるがめでたきことにて候ふなり、

信心ありとも、名号をとなへざらんは詮なく候ふ、

また一向名号をとなふとも、信心あさくは往生しがたく候ふ、

されば、念仏往生とふかく信じて、しかも名号をとなへんずるは、疑なき報土の往生にてあるべく候ふなり、 …(中略)…

この身は、いまは、としきはまりて候へば、さだめてさきだちて往生し候はんずれば、浄土にてかならずかならずまぢまゐらせ候べし、あなかしこ、あなかしこ、

(Ref『末灯抄第十二通(親鸞聖人御消息第二十六通)』註釈版聖典P七八五)

#### 一、野鳥の結縁

秋も深まったある日の夕刻のことです。

玄関の前に雀を大きくしたような愛くるしい目をした一羽の鳥がじっとしているではありませんか。近づいても逃げようとしません。

野良猫が来るといけないので、玄関をあけるとトントンと中に入ってしまった。米粒を与えてももう受けつけません。中庭に放してやろうとしても身を人間の手にはゆだねません。

夕食後に郵便屋さんが来て帰った後、「横になっているようだ」との坊守の声に来て見てみると、すでに息絶えて横たわっているのです。

それは、わずかな時間の出会いであったにも関わらず、人間ではなく野鳥の旅立ちであるにも関わらず、私は、つい先ごろ、母親を送ったときと変わらぬ厳粛な思いで一杯になるのです。

リビングライブズー平成二十一年十一月第二号「浄土にてかならずまぢまゐらせ候べし」

あくる朝、中庭に穴を掘り亡骸を葬ったのであります。

さぞかし自由にあちこちの空を飛びまわったであろうその生涯の最期に縁あってお寺に飛び込んだ一羽の野鳥が、朝夕お念仏の声の聞こえるお寺の玄関で生涯を終え、中庭に葬られたことを不思議に思いました。

そのご縁によって、さぞかし、次の世は、お念仏を阿弥陀如来のお喚び声と頂戴して呼び覚まされる人間界に生まれて来るであろうことかゆかしく感じたことであります。

#### 二、わが名を呼んで下さる機縁

来る十月十二日から十六日までは、大谷本廟での親鸞聖人七百五十回大遠忌法要がお勤まりになります。

そのご縁に遇わせて、三年前に往生した前住と少し早いのですが、今年五月に往いた前坊守のお骨収めを十五日に執り行うことにしました。

そこでその前日は、「出立ちの法要」をご門徒お同行の皆さまと共にお正信偈によりお勤めさせて戴くことになったのです。

**法要は、多忙で自らの往くべき世界を見失っている私たち凡夫がひとしきり如来様のご尊前にぬかづいて、真実の世界に眼を開かれ、如来様のお喚び声に呼び覚まされる大切な営みであります。**

先の十月第一号に「お名号を聞くとは」でそのお心を頂戴しました。

人間界に呱呱の声を上げて生を得た私に対して、わが名を命名し、わが名を呼び続け「よばふ」てくれた両親があったことであります。

やがて、そのよびごえがわが名を呼んでいてくれるよびごえであると知る時が来て、私は人間界に迎え入れられ、爾来、一人前の人間として長じるまでにお育てに与ったことであります。

それから…

平成二十一年十月十二日初版発行、二十一年十月二十一日 五四訂版 1

何十年かの年月が流れて、その人間界には、南無阿弥陀仏と称えれば聞こえてくださる阿弥陀如来のお喚び声に呼び覚まされる道が開かれてあるのだとお育てに与かるのであります。

「ついにそのときが来て」の「そのとき」というのは、如来様の仰せを仰せと疑いなく頂戴できる瞬間だということで、これを信心を頂戴する時剋(じこく)の極まりだというのであります。

如来様の仰せを仰せと頂戴できる瞬間、私は如来様の大きな体内(タターガタガルバ)に宿され、いつの日か必ずや如来様の世界に迎え入れられる胎児としてお育てに与ることになるのであります。

### 三、ご讃題は、念仏往生のお心を表わして下さる

ご讃題は、未灯抄第十二通(親鸞聖人御消息第二十六通であります。「浄土にてかならずかならずまぢまゐらせ候べし」というのはお弟子様に宛てられた親鸞聖人その人の肉声であります。なんとありがたいことでしょう。

このお手紙は、有阿弥陀仏というお弟子様からの質問(当時の関東教団で、「念仏往生ではお浄土の真ん中に生まれることはできないのでは」と疑う異説が巻き起ったことから、直接親鸞聖人にお手紙で不審を問い尋ねられたもの)に、親鸞聖人がお答えになったものであります。

お手紙では「念仏往生を否定することの誤りをただし、信心と念仏が決して離れて存在するものではない(行信不離)関係にあること」を分かりやすく解き明かして下さっているのであります。

その結びで、自らは「年齢も極まっていることであるからして、きっと先にお浄土に往生することであろう」、そのときは「浄土にてかならずかならずまぢまゐらせ候べし」とおっしゃっていて下さるのであります。

何と心強い何と人間味豊かな温かいお言葉でありましょうや。

お釈迦様が阿弥陀如来のご本願が今や成就されたことをお説き下さった仏説無量寿経下巻の本願成就文のお心については、親鸞聖人ご自身が一念多念証文でやさしく説き述べて下さることは既に何度もご紹介させて戴きました。

その御文を拝読いたしますと、親鸞聖人は

本願の名号をきくとのたまへるなり。

きくといふは、信心をあらわす御のりなり。

とあるごとく、親鸞聖人ご自身が、如来様の直説じきせつに聞き入っていらっしゃる事が分かるのであります。

ですから親鸞聖人のお言葉というのは、聖人自ら如来様のお言葉を聞き受けられたその体験に根差したお言葉であるといわねばなりません。

それゆえ、とんしんにが貪瞋二河のわが身の本当の姿を思い知らされて自力がスタリ、如来様の招喚しょうかんの勅命ちよくめいに呼び覚まされつつ浄土へと歩みゆく白道(びやくどう)のゴールでは確かに確かに親鸞聖人様がお待ちになって下さることは間違いのないことであります。

如来様のお浄土「西岸」には、初めて人間世界でわが名を呼んでくれた両親もまた「善友(ぜんぬ)」として待ち設けていて下さることもまた間違いのないことであります。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、合掌

|   |
|---|
| 正覚寺前住・前坊守お骨収め出立ちの法要 十月十四日夜七時半                   |
| 正覚寺報恩講 十月二十四日(土)お逮夜~二十五日(日)満日中                  |
| 正覚寺仏教壮年会例会 毎月第一日曜午後八時より                         |
| 正覚寺仏教婦人会例会 毎月十六日午後七時より                          |
| 著作編集兼発行元 りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)             |
| 〒520-0501 大津市北小松四五番地 ☎&Fax077-596-0166 住職 堅田 玄宥 |

<http://syohgakuji.web.fc2.com/> E-Mail:mhkatata@pluto.dti.ne.jp

## りびんぐらいぶず 平成二十一(二〇〇九)年十一月第二号

### 浄土にてかならずまぢまゐらせ候べし

弥陀の本願と申すは、名号をとなへんものをば極楽へ迎へんと誓はせたまひたるを、ふかく信じてとなふるがめでたきことにて候ふなり。

信心ありとも、名号をとなへざらんは詮なく候ふ。

また一向名号をとなふとも、信心あさくは往生しがたく候ふ。

されば、念仏往生とふかく信じて、しかも名号をとなへんずるは、疑なき報土の往生にてあるべく候ふなり。 …(中略)…

この身は、いまは、としきはまりて候へば、さだめてさきだちて往生し候はんずれば、浄土にてかならずかならずまぢまゐらせ候べし、あなかしこ、あなかしこ。

(Ref『末灯抄第十二通(親鸞聖人御消息第二十六通)』註釈版聖典P七八五)

#### 一、野鳥の結縁

秋も深まったある日の夕刻のことです。

玄関の前に雀を大きくしたような愛くるしい目をした一羽の鳥がじっとしているではありませんか。近づいても逃げようとしません。

野良猫が来るといけないので、玄関をあけるとトントンと中に入ってしまった。米粒を与えてももう受けつけません。中庭に放してやろうとしても身を人間の手にはゆだねません。

夕食後に郵便屋さんが来て帰った後、「横になっているようだ」との坊守の声に来て見てみると、すでに息絶えて横たわっているのです。

それは、わずかな時間の出会いであったにも関わらず、人間ではなく野鳥の旅立ちであるにも関わらず、私は、つい先ごろ、母親を送ったときと変わらぬ厳粛な思いで一杯になるのです。

リビングライブズー平成二十一年十一月第二号「浄土にてかならずまぢまゐらせ候べし」

あくる朝、中庭に穴を掘り亡骸を葬ったのであります。

さぞかし自由にあちこちの空を飛びまわったであろうその生涯の最期に縁あってお寺に飛び込んだ一羽の野鳥が、朝夕お念仏の声の聞こえるお寺の玄関で生涯を終え、中庭に葬られたことを不思議に思いました。

そのご縁によって、さぞかし、次の世は、お念仏を阿弥陀如来のお喚び声と頂戴して呼び覚まされる人間界に生まれて来るであろうことかどゆかしく感じたことであります。

#### 二、わが名を呼んで下さる機縁

来る十月十二日から十六日までは、大谷本廟での親鸞聖人七百五十回大遠忌法要がお勤まりになります。

そのご縁に遇わせて、三年前に往生した前住と少し早いのですが、今年五月に往いた前坊守のお骨収めを十五日に執り行うことにしました。

そこでその前日は、「出立ちの法要」をご門徒お同行の皆さまと共にお正信偈によりお勤めさせて戴くことになったのです。

**法要は、多忙で自らの往くべき世界を見失っている私たち凡夫がひとしきり如来様のご尊前にぬかづいて、真実の世界に眼を開かれ、如来様のお喚び声に呼び覚まされる大切な営みであります。**

先の十月第一号に「お名号を聞くとは」でそのお心を頂戴しました。

人間界に呱呱の声を上げて生を得た私に対して、わが名を命名し、わが名を呼び続け「よばふ」てくれた両親があったことであります。

やがて、そのよびごえがわが名を呼んでいてくれるよびごえであると知る時が来て、私は人間界に迎え入れられ、爾来、一人前の人間として長じるまでにお育てに与ったことであります。

それから…

平成二十一年十月十二日初版発行、二十一年十月二十一日 五四訂版 1

何十年かの年月が流れて、その人間界には、南無阿弥陀仏と称えれば聞こえてくださる阿弥陀如来のお喚び声に呼び覚まされる道が開かれてあるのだとお育てに与かるのであります。

「ついにそのときが来て」の「そのとき」というのは、如来様の仰せを仰せと疑いなく頂戴できる瞬間だということで、これを信心を頂戴する時剋(じこく)の極まりだというのであります。

如来様の仰せを仰せと頂戴できる瞬間、私は如来様の大きな体内(タターガタガルバ)に宿され、いつの日か必ずや如来様の世界に迎え入れられる胎児としてお育てに与ることになるのであります。

### 三、ご讃題は、念仏往生のお心を表わして下さる

ご讃題は、未灯抄第十二通(親鸞聖人御消息第二十六通であります。「浄土にてかならずかならずまぢまゐらせ候べし」というのはお弟子様に宛てられた親鸞聖人その人の肉声であります。なんとありがたいことでしょう。

このお手紙は、有阿弥陀仏というお弟子様からの質問(当時の関東教団で、「念仏往生ではお浄土の真ん中に生まれることはできないのでは」と疑う異説が巻き起ったことから、直接親鸞聖人にお手紙で不審を問い尋ねられたもの)に、親鸞聖人がお答えになったものであります。

お手紙では「念仏往生を否定することの誤りをただし、信心と念仏が決して離れて存在するものではない(行信不離)関係にあること」を分かりやすく解き明かして下さっているのであります。

その結びで、自らは「年齢も極まっていることであるからして、きっと先にお浄土に往生することであろう」、そのときは「浄土にてかならずかならずまぢまゐらせ候べし」とおっしゃっていて下さるのであります。

何と心強い何と人間味豊かな温かいお言葉でありましょうや。

お釈迦様が阿弥陀如来のご本願が今や成就されたことをお説き下さった仏説無量寿経下巻の本願成就文のお心については、親鸞聖人ご自身が一念多念証文でやさしく説き述べて下さることは既に何度もご紹介させて戴きました。

その御文を拝読いたしますと、親鸞聖人は

本願の名号をきくとのたまへるなり。

きくといふは、信心をあらわす御のりなり。

とあるごとく、親鸞聖人ご自身が、如来様の直説じきせつに聞き入っていらっしゃる事が分かるのであります。

ですから親鸞聖人のお言葉というのは、聖人自ら如来様のお言葉を聞き受けられたその体験に根差したお言葉であるといわねばなりません。

それゆえ、とんしんにが貪瞋二河のわが身の本当の姿を思い知らされて自力がスタリ、如来様の招喚しょうかんの勅命ちよくめいに呼び覚まされつつ浄土へと歩みゆく白道(びやくどう)のゴールでは確かに確かに親鸞聖人様がお待ちになって下さることは間違いのないことであります。

如来様のお浄土「西岸」には、初めて人間世界でわが名を呼んでくれた両親もまた「善友(ぜんぬ)」として待ち設けて下さることもまた間違いのないことであります。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、合掌

|  |
|--|
| 正覚寺前住・前坊守お骨収め出立ちの法要 十月十四日夜七時半<br>正覚寺報恩講 十月二十四日(土)お逮夜~二十五日(日)満日中<br>正覚寺仏教壮年会例会 毎月第一日曜午後八時より<br>正覚寺仏教婦人会例会 毎月十六日午後七時より<br>著作編集兼発行元 りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)<br>〒520-0501 大津市北小松四五番地 ☎&Fax077-596-0166 住職 堅田 玄宥 |
|--|

<http://syohgakuji.web.fc2.com/> E-Mail:mhkatata@pluto.dti.ne.jp

## りびんぐらいぶず 平成二十一(二〇〇九)年十一月第二号

### 浄土にてかならずまぢまゐらせ候べし

弥陀の本願と申すは、名号をとなへんものをば極楽へ迎へんと誓はせたまひたるを、ふかく信じてとなふるがめでたきことにて候ふなり、

信心ありとも、名号をとなへざらんは詮なく候ふ、

また一向名号をとなふとも、信心あさくは往生しがたく候ふ、

されば、念仏往生とふかく信じて、しかも名号をとなへんずるは、疑なき報土の往生にてあるべく候ふなり、 …(中略)…

この身は、いまは、としきはまりて候へば、さだめてさきだちて往生し候はんずれば、浄土にてかならずかならずまぢまゐらせ候べし、あなかしこ、あなかしこ、

(Ref『末灯抄第十二通(親鸞聖人御消息第二十六通)』註釈版聖典P七八五)

#### 一、野鳥の結縁

秋も深まったある日の夕刻のことです。

玄関の前に雀を大きくしたような愛くるしい目をした一羽の鳥がじっとしているではありませんか。近づいても逃げようとしません。

野良猫が来るといけないので、玄関をあけるとトントンと中に入ってしまった。米粒を与えてももう受けつけません。中庭に放してやろうとしても身を人間の手にはゆだねません。

夕食後に郵便屋さんが来て帰った後、「横になっているようだ」との坊守の声に来て見てみると、すでに息絶えて横たわっているのです。

それは、わずかな時間の出会いであったにも関わらず、人間ではなく野鳥の旅立ちであるにも関わらず、私は、つい先ごろ、母親を送ったときと変わらぬ厳粛な思いで一杯になるのです。

リビングライブズー平成二十一年十一月第二号「浄土にてかならずまぢまゐらせ候べし」

あくる朝、中庭に穴を掘り亡骸を葬ったのであります。

さぞかし自由にあちこちの空を飛びまわったであろうその生涯の最期に縁あってお寺に飛び込んだ一羽の野鳥が、朝夕お念仏の声の聞こえるお寺の玄関で生涯を終え、中庭に葬られたことを不思議に思いました。

そのご縁によって、さぞかし、次の世は、お念仏を阿弥陀如来のお喚び声と頂戴して呼び覚まされる人間界に生まれて来るであろうことかゆかしく感じたことであります。

#### 二、わが名を呼んで下さる機縁

来る十月十二日から十六日までは、大谷本廟での親鸞聖人七百五十回大遠忌法要がお勤まりになります。

そのご縁に遇わせて、三年前に往生した前住と少し早いのですが、今年五月に往いた前坊守のお骨収めを十五日に執り行うことにしました。

そこでその前日は、「出立ちの法要」をご門徒お同行の皆さまと共にお正信偈によりお勤めさせて戴くことになったのです。

**法要は、多忙で自らの往くべき世界を見失っている私たち凡夫がひとしきり如来様のご尊前にぬかづいて、真実の世界に眼を開かれ、如来様のお喚び声に呼び覚まされる大切な営みであります。**

先の十月第一号に「お名号を聞くとは」でそのお心を頂戴しました。

人間界に呱呱の声を上げて生を得た私に対して、わが名を命名し、わが名を呼び続け「よばふ」てくれた両親があったことであります。

やがて、そのよびごえがわが名を呼んでいてくれるよびごえであると知る時が来て、私は人間界に迎え入れられ、爾来、一人前の人間として長じるまでにお育てに与ったことであります。

それから…

平成二十一年十月十二日初版発行、二十一年十月二十一日 五四訂版 1

何十年かの年月が流れて、その人間界には、南無阿弥陀仏と称えれば聞こえてくださる阿弥陀如来のお喚び声に呼び覚まされる道が開かれてあるのだとお育てに与かるのであります。

「ついにそのときが来て」の「そのとき」というのは、如来様の仰せを仰せと疑いなく頂戴できる瞬間だということで、これを信心を頂戴する時剋(じこく)の極まりだというのであります。

如来様の仰せを仰せと頂戴できる瞬間、私は如来様の大きな体内(タターガタガルバ)に宿され、いつの日か必ずや如来様の世界に迎え入れられる胎児としてお育てに与ることになるのであります。

### 三、ご讃題は、念仏往生のお心を表わして下さる

ご讃題は、未灯抄第十二通(親鸞聖人御消息第二十六通であります。「浄土にてかならずかならずまぢまゐらせ候べし」というのはお弟子様に宛てられた親鸞聖人その人の肉声であります。なんとありがたいことでしょう。

このお手紙は、有阿弥陀仏というお弟子様からの質問(当時の関東教団で、「念仏往生ではお浄土の真ん中に生まれることはできないのでは」と疑う異説が巻き起ったことから、直接親鸞聖人にお手紙で不審を問い尋ねられたもの)に、親鸞聖人がお答えになったものであります。

お手紙では「念仏往生を否定することの誤りをただし、信心と念仏が決して離れて存在するものではない(行信不離)関係にあること」を分かりやすく解き明かして下さっているのであります。

その結びで、自らは「年齢も極まっていることであるからして、きっと先にお浄土に往生することであろう」、そのときは「浄土にてかならずかならずまぢまゐらせ候べし」とおっしゃっていて下さるのであります。

何と心強い何と人間味豊かな温かいお言葉でありましょうや。

お釈迦様が阿弥陀如来のご本願が今や成就されたことをお説き下さった仏説無量寿経下巻の本願成就文のお心については、親鸞聖人ご自身が一念多念証文でやさしく説き述べて下さることは既に何度もご紹介させて戴きました。

その御文を拝読いたしますと、親鸞聖人は

本願の名号をきくとのたまへるなり。

きくといふは、信心をあらわす御のりなり。

とあるごとく、親鸞聖人ご自身が、如来様の直説じきせつに聞き入っていらっしゃる事が分かるのであります。

ですから親鸞聖人のお言葉というのは、聖人自ら如来様のお言葉を聞き受けられたその体験に根差したお言葉であるといわねばなりません。

それゆえ、とんしんにが貪瞋二河のわが身の本当の姿を思い知らされて自力がスタリ、如来様の招喚しょうかんの勅命ちよくめいに呼び覚まされつつ浄土へと歩みゆく白道(びやくどう)のゴールでは確かに確かに親鸞聖人様がお待ちになって下さることは間違いのないことであります。

如来様のお浄土「西岸」には、初めて人間世界でわが名を呼んでくれた両親もまた「善友(ぜんぬ)」として待ち設けて下さることもまた間違いのないことであります。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、合掌

|   |
|---|
| 正覚寺前住・前坊守お骨収め出立ちの法要 十月十四日夜七時半                   |
| 正覚寺報恩講 十月二十四日(土)お逮夜~二十五日(日)満日中                  |
| 正覚寺仏教壮年会例会 毎月第一日曜午後八時より                         |
| 正覚寺仏教婦人会例会 毎月十六日午後七時より                          |
| 著作編集兼発行元 りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)             |
| 〒520-0501 大津市北小松四五番地 ☎&Fax077-596-0166 住職 堅田 玄宥 |

<http://syohgakuji.web.fc2.com/> E-Mail:mhkatata@pluto.dti.ne.jp

## りびんぐらいぶず 平成二十一(二〇〇九)年十一月第二号

### 浄土にてかならずまぢまゐらせ候べし

弥陀の本願と申すは、名号をとなへんものをば極楽へ迎へんと誓はせたまひたるを、ふかく信じてとなふるがめでたきことにて候ふなり、

信心ありとも、名号をとなへざらんは詮なく候ふ、

また一向名号をとなふとも、信心あさくは往生しがたく候ふ、

されば、念仏往生とふかく信じて、しかも名号をとなへんずるは、疑なき報土の往生にてあるべく候ふなり、 …(中略)…

この身は、いまは、としきはまりて候へば、さだめてさきだちて往生し候はんずれば、浄土にてかならずかならずまぢまゐらせ候べし、あなかしこ、あなかしこ、

(Ref『末灯抄第十二通(親鸞聖人御消息第二十六通)』註釈版聖典P七八五)

#### 一、野鳥の結縁

秋も深まったある日の夕刻のことです。

玄関の前に雀を大きくしたような愛くるしい目をした一羽の鳥がじっとしているではありませんか。近づいても逃げようとしません。

野良猫が来るといけないので、玄関をあけるとトントンと中に入ってしまった。米粒を与えてももう受けつけません。中庭に放してやろうとしても身を人間の手にはゆだねません。

夕食後に郵便屋さんが来て帰った後、「横になっているようだ」との坊守の声に来て見てみると、すでに息絶えて横たわっているのです。

それは、わずかな時間の出会いであったにも関わらず、人間ではなく野鳥の旅立ちであるにも関わらず、私は、つい先ごろ、母親を送ったときと変わらぬ厳粛な思いで一杯になるのです。

リビングライブズー平成二十一年十一月第二号「浄土にてかならずまぢまゐらせ候べし」

あくる朝、中庭に穴を掘り亡骸を葬ったのであります。

さぞかし自由にあちこちの空を飛びまわったであろうその生涯の最期に縁あってお寺に飛び込んだ一羽の野鳥が、朝夕お念仏の声の聞こえるお寺の玄関で生涯を終え、中庭に葬られたことを不思議に思いました。

そのご縁によって、さぞかし、次の世は、お念仏を阿弥陀如来のお喚び声と頂戴して呼び覚まされる人間界に生まれて来るであろうことかどゆかしく感じたことであります。

#### 二、わが名を呼んで下さる機縁

来る十月十二日から十六日までは、大谷本廟での親鸞聖人七百五十回大遠忌法要がお勤まりになります。

そのご縁に遇わせて、三年前に往生した前住と少し早いのですが、今年五月に往いた前坊守のお骨収めを十五日に執り行うことにしました。

そこでその前日は、「出立ちの法要」をご門徒お同行の皆さまと共にお正信偈によりお勤めさせて戴くことになったのです。

**法要は、多忙で自らの往くべき世界を見失っている私たち凡夫がひとしきり如来様のご尊前にぬかづいて、真実の世界に眼を開かれ、如来様のお喚び声に呼び覚まされる大切な営みであります。**

先の十月第一号に「お名号を聞くとは」でそのお心を頂戴しました。

人間界に呱呱の声を上げて生を得た私に対して、わが名を命名し、わが名を呼び続け「よばふ」てくれた両親があったことであります。

やがて、そのよびごえがわが名を呼んでいてくれるよびごえであると知る時が来て、私は人間界に迎え入れられ、爾来、一人前の人間として長じるまでにお育てに与ったことであります。

それから…

平成二十一年十月十二日初版発行、二十一年十月二十一日 五四訂版 1

何十年かの年月が流れて、その人間界には、南無阿弥陀仏と称えれば聞こえてくださる阿弥陀如来のお喚び声に呼び覚まされる道が開かれてあるのだとお育てに与かるのであります。

「ついにそのときが来て」の「そのとき」というのは、如来様の仰せを仰せと疑いなく頂戴できる瞬間だということで、これを信心を頂戴する時剋(じこく)の極まりだというのであります。

如来様の仰せを仰せと頂戴できる瞬間、私は如来様の大きな体内(タターガタガルバ)に宿され、いつの日か必ずや如来様の世界に迎え入れられる胎児としてお育てに与ることになるのであります。

### 三、ご讃題は、念仏往生のお心を表わして下さる

ご讃題は、未灯抄第十二通(親鸞聖人御消息第二十六通であります。「浄土にてかならずかならずまぢまゐらせ候べし」というのはお弟子様に宛てられた親鸞聖人その人の肉声であります。なんとありがたいことでしょう。

このお手紙は、有阿弥陀仏というお弟子様からの質問(当時の関東教団で、「念仏往生ではお浄土の真ん中に生まれることはできないのでは」と疑う異説が巻き起ったことから、直接親鸞聖人にお手紙で不審を問い尋ねられたもの)に、親鸞聖人がお答えになったものであります。

お手紙では「念仏往生を否定することの誤りをただし、信心と念仏が決して離れて存在するものではない(行信不離)関係にあること」を分かりやすく解き明かして下さっているのであります。

その結びで、自らは「年齢も極まっていることであるからして、きっと先にお浄土に往生することであろう」、そのときは「浄土にてかならずかならずまぢまゐらせ候べし」とおっしゃっていて下さるのであります。

何と心強い何と人間味豊かな温かいお言葉でありましょうや。

お釈迦様が阿弥陀如来のご本願が今や成就されたことをお説き下さった仏説無量寿経下巻の本願成就文のお心については、親鸞聖人ご自身が一念多念証文でやさしく説き述べて下さることは既に何度もご紹介させて戴きました。

その御文を拝読いたしますと、親鸞聖人は

本願の名号をきくとのたまへるなり。

きくといふは、信心をあらわす御のりなり。

とあるごとく、親鸞聖人ご自身が、如来様の直説じきせつに聞き入っていらっしゃることが分かるのであります。

ですから親鸞聖人のお言葉というのは、聖人自ら如来様のお言葉を聞き受けられたその体験に根差したお言葉であるといわねばなりません。

それゆえ、とんしんにが貪瞋二河のわが身の本当の姿を思い知らされて自力がスタリ、如来様の招喚しょうかんの勅命ちよくめいに呼び覚まされつつ浄土へと歩みゆく白道(びやくどう)のゴールでは確かに確かに親鸞聖人様がお待ちになって下さることは間違いのないことであります。

如来様のお浄土「西岸」には、初めて人間世界でわが名を呼んでくれた両親もまた「善友(ぜんぬ)」として待ち設けて下さることもまた間違いのないことであります。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、合掌

|  |
|--|
| 正覚寺前住・前坊守お骨収め出立ちの法要 十月十四日夜七時半<br>正覚寺報恩講 十月二十四日(土)お逮夜~二十五日(日)満日中<br>正覚寺仏教壮年会例会 毎月第一日曜午後八時より<br>正覚寺仏教婦人会例会 毎月十六日午後七時より<br>著作編集兼発行元 りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)<br>〒520-0501 大津市北小松四五番地 ☎&Fax077-596-0166 住職 堅田 玄宥 |
|--|

<http://syohgakuji.web.fc2.com/> E-Mail:mhkatata@pluto.dti.ne.jp



## りびんぐらいぶず 平成二十一(二〇〇九)年十一月第二号

### 浄土にてかならずまぢまゐらせ候べし

弥陀の本願と申すは、名号をとなへんものをば極楽へ迎へんと誓はせたまひたるを、ふかく信じてとなふるがめでたきことにて候ふなり。

信心ありとも、名号をとなへざらんは詮なく候ふ。

また一向名号をとなふとも、信心あさくは往生しがたく候ふ。

されば、念仏往生とふかく信じて、しかも名号をとなへんずるは、疑なき報土の往生にてあるべく候ふなり。 …(中略)…

この身は、いまは、としきはまりて候へば、さだめてさきだちて往生し候はんずれば、浄土にてかならずかならずまぢまゐらせ候べし、あなかしこ、あなかしこ。

(Ref『末灯抄第十二通(親鸞聖人御消息第二十六通)』註釈版聖典P七八五)

#### 一、野鳥の結縁

秋も深まったある日の夕刻のことです。

玄関の前に雀を大きくしたような愛くるしい目をした一羽の鳥がじっとしているではありませんか。近づいても逃げようとしません。

野良猫が来るといけないので、玄関をあけるとトントンと中に入ってしまった。米粒を与えてももう受けつけません。中庭に放してやろうとしても身を人間の手にはゆだねません。

夕食後に郵便屋さんが来て帰った後、「横になっているようだ」との坊守の声に来て見てみると、すでに息絶えて横たわっているのです。

それは、わずかな時間の出会いであったにも関わらず、人間ではなく野鳥の旅立ちであるにも関わらず、私は、つい先ごろ、母親を送ったときと変わらぬ厳粛な思いで一杯になるのです。

リビングライブズー平成二十一年十一月第二号「浄土にてかならずまぢまゐらせ候べし」

あくる朝、中庭に穴を掘り亡骸を葬ったのであります。

さぞかし自由にあちこちの空を飛びまわったであろうその生涯の最期に縁あってお寺に飛び込んだ一羽の野鳥が、朝夕お念仏の声の聞こえるお寺の玄関で生涯を終え、中庭に葬られたことを不思議に思いました。

そのご縁によって、さぞかし、次の世は、お念仏を阿弥陀如来のお喚び声と頂戴して呼び覚まされる人間界に生まれて来るであろうことかゆかしく感じたことであります。

#### 二、わが名を呼んで下さる機縁

来る十月十二日から十六日までは、大谷本廟での親鸞聖人七百五十回大遠忌法要がお勤まりになります。

そのご縁に遇わせて、三年前に往生した前住と少し早いのですが、今年五月に往いた前坊守のお骨収めを十五日に執り行うことにしました。

そこでその前日は、「出立ちの法要」をご門徒お同行の皆さまと共にお正信偈によりお勤めさせて戴くことになったのです。

**法要は、多忙で自らの往くべき世界を見失っている私たち凡夫がひとしきり如来様のご尊前にぬかづいて、真実の世界に眼を開かれ、如来様のお喚び声に呼び覚まされる大切な営みであります。**

先の十月第一号に「お名号を聞くとは」でそのお心を頂戴しました。

人間界に呱呱の声を上げて生を得た私に対して、わが名を命名し、わが名を呼び続け「よばふ」てくれた両親があったことであります。

やがて、そのよびごえがわが名を呼んでいてくれるよびごえであると知る時が来て、私は人間界に迎え入れられ、爾来、一人前の人間として長じるまでにお育てに与ったことであります。

それから…

平成二十一年十月十二日初版発行、二十一年十月二十一日 五四訂版 1

何十年かの年月が流れて、その人間界には、南無阿弥陀仏と称えれば聞こえてくださる阿弥陀如来のお喚び声に呼び覚まされる道が開かれてあるのだとお育てに与かるのであります。

「ついにそのときが来て」の「そのとき」というのは、如来様の仰せを仰せと疑いなく頂戴できる瞬間だということで、これを信心を頂戴する時剋(じこく)の極まりだというのであります。

如来様の仰せを仰せと頂戴できる瞬間、私は如来様の大きな体内(タターガタガルバ)に宿され、いつの日か必ずや如来様の世界に迎え入れられる胎児としてお育てに与ることになるのであります。

### 三、ご讃題は、念仏往生のお心を表わして下さる

ご讃題は、未灯抄第十二通(親鸞聖人御消息第二十六通であります。「浄土にてかならずかならずまぢまゐらせ候べし」というのはお弟子様に宛てられた親鸞聖人その人の肉声であります。なんとありがたいことでしょう。

このお手紙は、有阿弥陀仏というお弟子様からの質問(当時の関東教団で、「念仏往生ではお浄土の真ん中に生まれることはできないのでは」と疑う異説が巻き起ったことから、直接親鸞聖人にお手紙で不審を問い尋ねられたもの)に、親鸞聖人がお答えになったものであります。

お手紙では「念仏往生を否定することの誤りをただし、信心と念仏が決して離れて存在するものではない(行信不離)関係にあること」を分かりやすく解き明かして下さっているのであります。

その結びで、自らは「年齢も極まっていることであるからして、きっと先にお浄土に往生することであろう」、そのときは「浄土にてかならずかならずまぢまゐらせ候べし」とおっしゃって下さるのであります。

何と心強い何と人間味豊かな温かいお言葉でありましょうや。

お釈迦様が阿弥陀如来のご本願が今や成就されたことをお説き下さった仏説無量寿経下巻の本願成就文のお心については、親鸞聖人ご自身が一念多念証文でやさしく説き述べて下さることは既に何度もご紹介させて戴きました。

その御文を拝読いたしますと、親鸞聖人は

本願の名号をきくとのたまへるなり。

きくといふは、信心をあらわす御のりなり。

とあるごとく、親鸞聖人ご自身が、如来様の直説じきせつに聞き入っていらっしゃる事が分かるのであります。

ですから親鸞聖人のお言葉というのは、聖人自ら如来様のお言葉を聞き受けられたその体験に根差したお言葉であるといわねばなりません。

それゆえ、とんしんにが貪瞋二河のわが身の本当の姿を思い知らされて自力がスタリ、如来様の招喚しょうかんの勅命ちよくめいに呼び覚まされつつ浄土へと歩みゆく白道(びやくどう)のゴールでは確かに確かに親鸞聖人様がお待ちになって下さることは間違いのないことであります。

如来様のお浄土「西岸」には、初めて人間世界でわが名を呼んでくれた両親もまた「善友(ぜんぬ)」として待ち設けて下さることもまた間違いのないことであります。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、合掌

|   |
|---|
| 正覚寺前住・前坊守お骨収め出立ちの法要 十月十四日夜七時半                   |
| 正覚寺報恩講 十月二十四日(土)お逮夜～二十五日(日)満日中                  |
| 正覚寺仏教壮年会例会 毎月第一日曜午後八時より                         |
| 正覚寺仏教婦人会例会 毎月十六日午後七時より                          |
| 著作編集兼発行元 りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)             |
| 〒520-0501 大津市北小松四五番地 ☎&Fax077-596-0166 住職 堅田 玄宥 |

<http://syohgakuji.web.fc2.com/> E-Mail:mhkatata@pluto.dti.ne.jp

## りびんぐらいぶず 平成二十一(二〇〇九)年十一月第二号

### 浄土にてかならずまぢまゐらせ候べし

弥陀の本願と申すは、名号をとなへんものをば極楽へ迎へんと誓はせたまひたるを、ふかく信じてとなふるがめでたきことにて候ふなり。

信心ありとも、名号をとなへざらんは詮なく候ふ。

また一向名号をとなふとも、信心あさくは往生しがたく候ふ。

されば、念仏往生とふかく信じて、しかも名号をとなへんずるは、疑なき報土の往生にてあるべく候ふなり。 …(中略)…

この身は、いまは、としきはまりて候へば、さだめてさきだちて往生し候はんずれば、浄土にてかならずかならずまぢまゐらせ候べし、あなかしこ、あなかしこ。

(Ref『末灯抄第十二通(親鸞聖人御消息第二十六通)』註釈版聖典P七八五)

#### 一、野鳥の結縁

秋も深まったある日の夕刻のことです。

玄関の前に雀を大きくしたような愛くるしい目をした一羽の鳥がじっとしているではありませんか。近づいても逃げようとしません。

野良猫が来るといけないので、玄関をあけるとトントンと中に入ってしまった。米粒を与えてももう受けつけません。中庭に放してやろうとしても身を人間の手にはゆだねません。

夕食後に郵便屋さんが来て帰った後、「横になっているようだ」との坊守の声に来て見てみると、すでに息絶えて横たわっているのです。

それは、わずかな時間の出会いであったにも関わらず、人間ではなく野鳥の旅立ちであるにも関わらず、私は、つい先ごろ、母親を送ったときと変わらぬ厳粛な思いで一杯になるのです。

リビングライブズー平成二十一年十一月第二号「浄土にてかならずまぢまゐらせ候べし」

あくる朝、中庭に穴を掘り亡骸を葬ったのであります。

さぞかし自由にあちこちの空を飛びまわったであろうその生涯の最期に縁あってお寺に飛び込んだ一羽の野鳥が、朝夕お念仏の声の聞こえるお寺の玄関で生涯を終え、中庭に葬られたことを不思議に思いました。

そのご縁によって、さぞかし、次の世は、お念仏を阿弥陀如来のお喚び声と頂戴して呼び覚まされる人間界に生まれて来るであろうことかゆかしく感じたことであります。

#### 二、わが名を呼んで下さる機縁

来る十月十二日から十六日までは、大谷本廟での親鸞聖人七百五十回大遠忌法要がお勤まりになります。

そのご縁に遇わせて、三年前に往生した前住と少し早いのですが、今年五月に往いた前坊守のお骨収めを十五日に執り行うことにしました。

そこでその前日は、「出立ちの法要」をご門徒お同行の皆さまと共にお正信偈によりお勤めさせて戴くことになったのです。

**法要は、多忙で自らの往くべき世界を見失っている私たち凡夫がひとしきり如来様のご尊前にぬかづいて、真実の世界に眼を開かれ、如来様のお喚び声に呼び覚まされる大切な営みであります。**

先の十月第一号に「お名号を聞くとは」でそのお心を頂戴しました。

人間界に呱呱の声を上げて生を得た私に対して、わが名を命名し、わが名を呼び続け「よばふ」てくれた両親があったことであります。

やがて、そのよびごえがわが名を呼んでいてくれるよびごえであると知る時が来て、私は人間界に迎え入れられ、爾来、一人前の人間として長じるまでにお育てに与ったことであります。

それから…

平成二十一年十月十二日初版発行、二十一年十月二十一日 五四訂版 1

何十年かの年月が流れて、その人間界には、南無阿弥陀仏と称えれば聞こえてくださる阿弥陀如来のお喚び声に呼び覚まされる道が開かれてあるのだとお育てに与かるのであります。

「ついにそのときが来て」の「そのとき」というのは、如来様の仰せを仰せと疑いなく頂戴できる瞬間だということで、これを信心を頂戴する時剋(じこく)の極まりだというのであります。

如来様の仰せを仰せと頂戴できる瞬間、私は如来様の大きな体内(タターガタガルバ)に宿され、いつの日か必ずや如来様の世界に迎え入れられる胎児としてお育てに与ることになるのであります。

### 三、ご讃題は、念仏往生のお心を表わして下さる

ご讃題は、未灯抄第十二通(親鸞聖人御消息第二十六通であります。「浄土にてかならずかならずまぢまゐらせ候べし」というのはお弟子様に宛てられた親鸞聖人その人の肉声であります。なんとありがたいことでしょう。

このお手紙は、有阿弥陀仏というお弟子様からの質問(当時の関東教団で、「念仏往生ではお浄土の真ん中に生まれることはできないのでは」と疑う異説が巻き起ったことから、直接親鸞聖人にお手紙で不審を問い尋ねられたもの)に、親鸞聖人がお答えになったものであります。

お手紙では「念仏往生を否定することの誤りをただし、信心と念仏が決して離れて存在するものではない(行信不離)関係にあること」を分かりやすく解き明かして下さっているのであります。

その結びで、自らは「年齢も極まっていることであるからして、きっと先にお浄土に往生することであろう」、そのときは「浄土にてかならずかならずまぢまゐらせ候べし」とおっしゃっていて下さるのであります。

何と心強い何と人間味豊かな温かいお言葉でありましょうや。

お釈迦様が阿弥陀如来のご本願が今や成就されたことをお説き下さった仏説無量寿経下巻の本願成就文のお心については、親鸞聖人ご自身が一念多念証文でやさしく説き述べて下さることは既に何度もご紹介させて戴きました。

その御文を拝読いたしますと、親鸞聖人は

本願の名号をきくとのたまへるなり。

きくといふは、信心をあらわす御のりなり。

とあるごとく、親鸞聖人ご自身が、如来様の直説じきせつに聞き入っていらっしゃる事が分かるのであります。

ですから親鸞聖人のお言葉というのは、聖人自ら如来様のお言葉を聞き受けられたその体験に根差したお言葉であるといわねばなりません。

それゆえ、とんしんにが貪瞋二河のわが身の本当の姿を思い知らされて自力がスタリ、如来様の招喚しょうかんの勅命ちよくめいに呼び覚まされつつ浄土へと歩みゆく白道(びやくどう)のゴールでは確かに確かに親鸞聖人様がお待ちになって下さることは間違いのないことであります。

如来様のお浄土「西岸」には、初めて人間世界でわが名を呼んでくれた両親もまた「善友(ぜんぬ)」として待ち設けて下さることもまた間違いのないことであります。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、合掌

|   |
|---|
| 正覚寺前住・前坊守お骨収め出立ちの法要 十月十四日夜七時半                   |
| 正覚寺報恩講 十月二十四日(土)お逮夜～二十五日(日)満日中                  |
| 正覚寺仏教壮年会例会 毎月第一日曜午後八時より                         |
| 正覚寺仏教婦人会例会 毎月十六日午後七時より                          |
| 著作編集兼発行元 りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)             |
| 〒520-0501 大津市北小松四五番地 ☎&Fax077-596-0166 住職 堅田 玄宥 |

<http://syohgakuji.web.fc2.com/> E-Mail:mhkatata@pluto.dti.ne.jp

## りびんぐらいぶず 平成二十一(二〇〇九)年十一月第二号

### 浄土にてかならずまぢまゐらせ候べし

弥陀の本願と申すは、名号をとなへんものをば極楽へ迎へんと誓はせたまひたるを、ふかく信じてとなふるがめでたきことにて候ふなり、

信心ありとも、名号をとなへざらんは詮なく候ふ、

また一向名号をとなふとも、信心あさくは往生しがたく候ふ、

されば、念仏往生とふかく信じて、しかも名号をとなへんずるは、疑なき報土の往生にてあるべく候ふなり、 …(中略)…

この身は、いまは、としきはまりて候へば、さだめてさきだちて往生し候はんずれば、浄土にてかならずかならずまぢまゐらせ候べし、あなかしこ、あなかしこ、

(Ref『末灯抄第十二通(親鸞聖人御消息第二十六通)』註釈版聖典P七八五)

#### 一、野鳥の結縁

秋も深まったある日の夕刻のことです。

玄関の前に雀を大きくしたような愛くるしい目をした一羽の鳥がじっとしているではありませんか。近づいても逃げようとしません。

野良猫が来るといけないので、玄関をあけるとトントンと中に入ってしまった。米粒を与えてももう受けつけません。中庭に放してやろうとしても身を人間の手にはゆだねません。

夕食後に郵便屋さんが来て帰った後、「横になっているようだ」との坊守の声に来て見てみると、すでに息絶えて横たわっているのです。

それは、わずかな時間の出会いであったにも関わらず、人間ではなく野鳥の旅立ちであるにも関わらず、私は、つい先ごろ、母親を送ったときと変わらぬ厳粛な思いで一杯になるのです。

リビングライブズー平成二十一年十一月第二号「浄土にてかならずまぢまゐらせ候べし」

あくる朝、中庭に穴を掘り亡骸を葬ったのであります。

さぞかし自由にあちこちの空を飛びまわったであろうその生涯の最期に縁あってお寺に飛び込んだ一羽の野鳥が、朝夕お念仏の声の聞こえるお寺の玄関で生涯を終え、中庭に葬られたことを不思議に思いました。

そのご縁によって、さぞかし、次の世は、お念仏を阿弥陀如来のお喚び声と頂戴して呼び覚まされる人間界に生まれて来るであろうことかゆかしく感じたことであります。

#### 二、わが名を呼んで下さる機縁

来る十月十二日から十六日までは、大谷本廟での親鸞聖人七百五十回大遠忌法要がお勤まりになります。

そのご縁に遇わせて、三年前に往生した前住と少し早いのですが、今年五月に往いた前坊守のお骨収めを十五日に執り行うことにしました。

そこでその前日は、「出立ちの法要」をご門徒お同行の皆さまと共にお正信偈によりお勤めさせて戴くことになったのです。

**法要は、多忙で自らの往くべき世界を見失っている私たち凡夫がひとしきり如来様のご尊前にぬかづいて、真実の世界に眼を開かれ、如来様のお喚び声に呼び覚まされる大切な営みであります。**

先の十月第一号に「お名号を聞くとは」でそのお心を頂戴しました。

人間界に呱呱の声を上げて生を得た私に対して、わが名を命名し、わが名を呼び続け「よばふ」てくれた両親があったことであります。

やがて、そのよびごえがわが名を呼んでいてくれるよびごえであると知る時が来て、私は人間界に迎え入れられ、爾来、一人前の人間として長じるまでにお育てに与ったことであります。

それから…

平成二十一年十月十二日初版発行、二十一年十月二十一日 五四訂版 1

何十年かの年月が流れて、その人間界には、南無阿弥陀仏と称えれば聞こえてくださる阿弥陀如来のお喚び声に呼び覚まされる道が開かれてあるのだとお育てに与かるのであります。

「ついにそのときが来て」の「そのとき」というのは、如来様の仰せを仰せと疑いなく頂戴できる瞬間だということで、これを信心を頂戴する時剋(じこく)の極まりだというのであります。

如来様の仰せを仰せと頂戴できる瞬間、私は如来様の大きな体内(タターガタガルバ)に宿され、いつの日か必ずや如来様の世界に迎え入れられる胎児としてお育てに与ることになるのであります。

### 三、ご讃題は、念仏往生のお心を表わして下さる

ご讃題は、未灯抄第十二通(親鸞聖人御消息第二十六通であります。「浄土にてかならずかならずまぢまゐらせ候べし」というのはお弟子様に宛てられた親鸞聖人その人の肉声であります。なんとありがたいことでしょう。

このお手紙は、有阿弥陀仏というお弟子様からの質問(当時の関東教団で、「念仏往生ではお浄土の真ん中に生まれることはできないのでは」と疑う異説が巻き起ったことから、直接親鸞聖人にお手紙で不審を問い尋ねられたもの)に、親鸞聖人がお答えになったものであります。

お手紙では「念仏往生を否定することの誤りをただし、信心と念仏が決して離れて存在するものではない(行信不離)関係にあること」を分かりやすく解き明かして下さっているのであります。

その結びで、自らは「年齢も極まっていることであるからして、きっと先にお浄土に往生することであろう」、そのときは「浄土にてかならずかならずまぢまゐらせ候べし」とおっしゃっていて下さるのであります。

何と心強い何と人間味豊かな温かいお言葉でありましょうや。

お釈迦様が阿弥陀如来のご本願が今や成就されたことをお説き下さった仏説無量寿経下巻の本願成就文のお心については、親鸞聖人ご自身が一念多念証文でやさしく説き述べて下さることは既に何度もご紹介させて戴きました。

その御文を拝読いたしますと、親鸞聖人は

本願の名号をきくとのたまへるなり。

きくといふは、信心をあらわす御のりなり。

とあるごとく、親鸞聖人ご自身が、如来様の直説じきせつに聞き入っていらっしゃる事が分かるのであります。

ですから親鸞聖人のお言葉というのは、聖人自ら如来様のお言葉を聞き受けられたその体験に根差したお言葉であるといわねばなりません。

それゆえ、とんしんにが貪瞋二河のわが身の本当の姿を思い知らされて自力がスタリ、如来様の招喚しょうかんの勅命ちよくめいに呼び覚まされつつ浄土へと歩みゆく白道(びやくどう)のゴールでは確かに確かに親鸞聖人様がお待ちになって下さることは間違いのないことであります。

如来様のお浄土「西岸」には、初めて人間世界でわが名を呼んでくれた両親もまた「善友(ぜんぬ)」として待ち設けて下さることもまた間違いのないことであります。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、合掌

|   |
|---|
| 正覚寺前住・前坊守お骨収め出立ちの法要 十月十四日夜七時半                   |
| 正覚寺報恩講 十月二十四日(土)お逮夜~二十五日(日)満日中                  |
| 正覚寺仏教壮年会例会 毎月第一日曜午後八時より                         |
| 正覚寺仏教婦人会例会 毎月十六日午後七時より                          |
| 著作編集兼発行元 りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)             |
| 〒520-0501 大津市北小松四五番地 ☎&Fax077-596-0166 住職 堅田 玄宥 |

<http://syohgakuji.web.fc2.com/> E-Mail:mhkatata@pluto.dti.ne.jp

## りびんぐらいぶず 平成二十一(二〇〇九)年十一月第二号

### 浄土にてかならずまぢまゐらせ候べし

弥陀の本願と申すは、名号をとなへんものをば極楽へ迎へんと誓はせたまひたるを、ふかく信じてとなふるがめでたきことにて候ふなり。

信心ありとも、名号をとなへざらんは詮なく候ふ。

また一向名号をとなふとも、信心あさくは往生しがたく候ふ。

されば、念仏往生とふかく信じて、しかも名号をとなへんずるは、疑なき報土の往生にてあるべく候ふなり。 …(中略)…

この身は、いまは、としきはまりて候へば、さだめてさきだちて往生し候はんずれば、浄土にてかならずかならずまぢまゐらせ候べし、あなかしこ、あなかしこ。

(Ref『末灯抄第十二通(親鸞聖人御消息第二十六通)』註釈版聖典P七八五)

#### 一、野鳥の結縁

秋も深まったある日の夕刻のことです。

玄関の前に雀を大きくしたような愛くるしい目をした一羽の鳥がじっとしているではありませんか。近づいても逃げようとしません。

野良猫が来るといけないので、玄関をあけるとトントンと中に入ってしまった。米粒を与えてももう受けつけません。中庭に放してやろうとしても身を人間の手にはゆだねません。

夕食後に郵便屋さんが来て帰った後、「横になっているようだ」との坊守の声に来て見てみると、すでに息絶えて横たわっているのです。

それは、わずかな時間の出会いであったにも関わらず、人間ではなく野鳥の旅立ちであるにも関わらず、私は、つい先ごろ、母親を送ったときと変わらぬ厳粛な思いで一杯になるのです。

リビングライブズー平成二十一年十一月第二号「浄土にてかならずまぢまゐらせ候べし」

あくる朝、中庭に穴を掘り亡骸を葬ったのであります。

さぞかし自由にあちこちの空を飛びまわったであろうその生涯の最期に縁あってお寺に飛び込んだ一羽の野鳥が、朝夕お念仏の声の聞こえるお寺の玄関で生涯を終え、中庭に葬られたことを不思議に思いました。

そのご縁によって、さぞかし、次の世は、お念仏を阿弥陀如来のお喚び声と頂戴して呼び覚まされる人間界に生まれて来るであろうことかどゆかしく感じたことであります。

#### 二、わが名を呼んで下さる機縁

来る十月十二日から十六日までは、大谷本廟での親鸞聖人七百五十回大遠忌法要がお勤まりになります。

そのご縁に遇わせて、三年前に往生した前住と少し早いのですが、今年五月に往いた前坊守のお骨収めを十五日に執り行うことにしました。

そこでその前日は、「出立ちの法要」をご門徒お同行の皆さまと共にお正信偈によりお勤めさせて戴くことになったのです。

**法要は、多忙で自らの往くべき世界を見失っている私たち凡夫がひとしきり如来様のご尊前にぬかづいて、真実の世界に眼を開かれ、如来様のお喚び声に呼び覚まされる大切な営みであります。**

先の十月第一号に「お名号を聞くとは」でそのお心を頂戴しました。

人間界に呱呱の声を上げて生を得た私に対して、わが名を命名し、わが名を呼び続け「よばふ」てくれた両親があったことであります。

やがて、そのよびごえがわが名を呼んでいてくれるよびごえであると知る時が来て、私は人間界に迎え入れられ、爾来、一人前の人間として長じるまでにお育てに与ったことであります。

それから…

平成二十一年十月十二日初版発行、二十一年十月二十一日 五四訂版 1

何十年かの年月が流れて、その人間界には、南無阿弥陀仏と称えれば聞こえてくださる阿弥陀如来のお喚び声に呼び覚まされる道が開かれてあるのだとお育てに与かるのであります。

「ついにそのときが来て」の「そのとき」というのは、如来様の仰せを仰せと疑いなく頂戴できる瞬間だということで、これを信心を頂戴する時剋(じこく)の極まりだというのであります。

如来様の仰せを仰せと頂戴できる瞬間、私は如来様の大きな体内(タターガタガルバ)に宿され、いつの日か必ずや如来様の世界に迎え入れられる胎児としてお育てに与ることになるのであります。

### 三、ご讃題は、念仏往生のお心を表わして下さる

ご讃題は、未灯抄第十二通(親鸞聖人御消息第二十六通であります。「浄土にてかならずかならずまぢまゐらせ候べし」というのはお弟子様に宛てられた親鸞聖人その人の肉声であります。なんとありがたいことでしょう。

このお手紙は、有阿弥陀仏というお弟子様からの質問(当時の関東教団で、「念仏往生ではお浄土の真ん中に生まれることはできないのでは」と疑う異説が巻き起ったことから、直接親鸞聖人にお手紙で不審を問い尋ねられたもの)に、親鸞聖人がお答えになったものであります。

お手紙では「念仏往生を否定することの誤りをただし、信心と念仏が決して離れて存在するものではない(行信不離)関係にあること」を分かりやすく解き明かして下さっているのであります。

その結びで、自らは「年齢も極まっていることであるからして、きっと先にお浄土に往生することであろう」、そのときは「浄土にてかならずかならずまぢまゐらせ候べし」とおっしゃっていて下さるのであります。

何と心強い何と人間味豊かな温かいお言葉でありましょうや。

お釈迦様が阿弥陀如来のご本願が今や成就されたことをお説き下さった仏説無量寿経下巻の本願成就文のお心については、親鸞聖人ご自身が一念多念証文でやさしく説き述べて下さることは既に何度もご紹介させて戴きました。

その御文を拝読いたしますと、親鸞聖人は

本願の名号をきくとのたまへるなり。

きくといふは、信心をあらわす御のりなり。

とあるごとく、親鸞聖人ご自身が、如来様の直説じきせつに聞き入っていらっしゃる事が分かるのであります。

ですから親鸞聖人のお言葉というのは、聖人自ら如来様のお言葉を聞き受けられたその体験に根差したお言葉であるといわねばなりません。

それゆえ、とんしんにが貪瞋二河のわが身の本当の姿を思い知らされて自力がスタリ、如来様の招喚しょうかんの勅命ちよくめいに呼び覚まされつつ浄土へと歩みゆく白道(びやくどう)のゴールでは確かに確かに親鸞聖人様がお待ちになって下さることは間違いのないことであります。

如来様のお浄土「西岸」には、初めて人間世界でわが名を呼んでくれた両親もまた「善友(ぜんぬ)」として待ち設けていて下さることもまた間違いのないことであります。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、合掌

正覚寺前住・前坊守お骨収め出立ちの法要 十月十四日夜七時半  
正覚寺報恩講 十月二十四日(土)お逮夜~二十五日(日)満日中  
正覚寺仏教壮年会例会 毎月第一日曜午後八時より  
正覚寺仏教婦人会例会 毎月十六日午後七時より  
著作編集兼発行元 りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)  
〒520-0501 大津市北小松四五番地 ☎&Fax077-596-0166 住職 堅田 玄宥

<http://syohgakuji.web.fc2.com/> E-Mail:mhkatata@pluto.dti.ne.jp



## りびんぐらいぶず 平成二十一(二〇〇九)年十一月第二号

### 浄土にてかならずまぢまゐらせ候べし

弥陀の本願と申すは、名号をとなへんものをば極楽へ迎へんと誓はせたまひたるを、ふかく信じてとなふるがめでたきことにて候ふなり。

信心ありとも、名号をとなへざらんは詮なく候ふ。

また一向名号をとなふとも、信心あさくは往生しがたく候ふ。

されば、念仏往生とふかく信じて、しかも名号をとなへんずるは、疑なき報土の往生にてあるべく候ふなり。 …(中略)…

この身は、いまは、としきはまりて候へば、さだめてさきだちて往生し候はんずれば、浄土にてかならずかならずまぢまゐらせ候べし、あなかしこ、あなかしこ。

(Ref『末灯抄第十二通(親鸞聖人御消息第二十六通)』註釈版聖典P七八五)

#### 一、野鳥の結縁

秋も深まったある日の夕刻のことです。

玄関の前に雀を大きくしたような愛くるしい目をした一羽の鳥がじっとしているではありませんか。近づいても逃げようとしません。

野良猫が来るといけないので、玄関をあけるとトントンと中に入ってしまった。米粒を与えてももう受けつけません。中庭に放してやろうとしても身を人間の手にはゆだねません。

夕食後に郵便屋さんが来て帰った後、「横になっているようだ」との坊守の声に来て見てみると、すでに息絶えて横たわっているのです。

それは、わずかな時間の出会いであったにも関わらず、人間ではなく野鳥の旅立ちであるにも関わらず、私は、つい先ごろ、母親を送ったときと変わらぬ厳粛な思いで一杯になるのです。

リビングライブズー平成二十一年十一月第二号「浄土にてかならずまぢまゐらせ候べし」

あくる朝、中庭に穴を掘り亡骸を葬ったのであります。

さぞかし自由にあちこちの空を飛びまわったであろうその生涯の最期に縁あってお寺に飛び込んだ一羽の野鳥が、朝夕お念仏の声の聞こえるお寺の玄関で生涯を終え、中庭に葬られたことを不思議に思いました。

そのご縁によって、さぞかし、次の世は、お念仏を阿弥陀如来のお喚び声と頂戴して呼び覚まされる人間界に生まれて来るであろうことかどゆかしく感じたことであります。

#### 二、わが名を呼んで下さる機縁

来る十月十二日から十六日までは、大谷本廟での親鸞聖人七百五十回大遠忌法要がお勤まりになります。

そのご縁に遇わせて、三年前に往生した前住と少し早いのですが、今年五月に往いた前坊守のお骨収めを十五日に執り行うことにしました。

そこでその前日は、「出立ちの法要」をご門徒お同行の皆さまと共にお正信偈によりお勤めさせて戴くことになったのです。

**法要は、多忙で自らの往くべき世界を見失っている私たち凡夫がひとしきり如来様のご尊前にぬかづいて、真実の世界に眼を開かれ、如来様のお喚び声に呼び覚まされる大切な営みであります。**

先の十月第一号に「お名号を聞くとは」でそのお心を頂戴しました。

人間界に呱呱の声を上げて生を得た私に対して、わが名を命名し、わが名を呼び続け「よばふ」てくれた両親があったことであります。

やがて、そのよびごえがわが名を呼んでいてくれるよびごえであると知る時が来て、私は人間界に迎え入れられ、爾来、一人前の人間として長じるまでにお育てに与ったことであります。

それから…

平成二十一年十月十二日初版発行、二十一年十月二十一日 五四訂版 1

何十年かの年月が流れて、その人間界には、南無阿弥陀仏と称えれば聞こえてくださる阿弥陀如来のお喚び声に呼び覚まされる道が開かれてあるのだとお育てに与かるのであります。

「ついにそのときが来て」の「そのとき」というのは、如来様の仰せを仰せと疑いなく頂戴できる瞬間だということで、これを信心を頂戴する時剋(じこく)の極まりだというのであります。

如来様の仰せを仰せと頂戴できる瞬間、私は如来様の大きな体内(タターガタガルバ)に宿され、いつの日か必ずや如来様の世界に迎え入れられる胎児としてお育てに与ることになるのであります。

### 三、ご讃題は、念仏往生のお心を表わして下さる

ご讃題は、未灯抄第十二通(親鸞聖人御消息第二十六通であります。「浄土にてかならずかならずまぢまゐらせ候べし」というのはお弟子様に宛てられた親鸞聖人その人の肉声であります。なんとありがたいことでしょう。

このお手紙は、有阿弥陀仏というお弟子様からの質問(当時の関東教団で、「念仏往生ではお浄土の真ん中に生まれることはできないのでは」と疑う異説が巻き起ったことから、直接親鸞聖人にお手紙で不審を問い尋ねられたもの)に、親鸞聖人がお答えになったものであります。

お手紙では「念仏往生を否定することの誤りをただし、信心と念仏が決して離れて存在するものではない(行信不離)関係にあること」を分かりやすく解き明かして下さっているのであります。

その結びで、自らは「年齢も極まっていることであるからして、きっと先にお浄土に往生することであろう」、そのときは「浄土にてかならずかならずまぢまゐらせ候べし」とおっしゃっていて下さるのであります。

何と心強い何と人間味豊かな温かいお言葉でありましょうや。

お釈迦様が阿弥陀如来のご本願が今や成就されたことをお説き下さった仏説無量寿経下巻の本願成就文のお心については、親鸞聖人ご自身が一念多念証文でやさしく説き述べて下さることは既に何度もご紹介させて戴きました。

その御文を拝読いたしますと、親鸞聖人は

本願の名号をきくとのたまへるなり。

きくといふは、信心をあらわす御のりなり。

とあるごとく、親鸞聖人ご自身が、如来様の直説じきせつに聞き入っていらっしゃる事が分かるのであります。

ですから親鸞聖人のお言葉というのは、聖人自ら如来様のお言葉を聞き受けられたその体験に根差したお言葉であるといわねばなりません。

それゆえ、とんしんにが貪瞋二河のわが身の本当の姿を思い知らされて自力がスタリ、如来様の招喚しょうかんの勅命ちよくめいに呼び覚まされつつ浄土へと歩みゆく白道(びやくどう)のゴールでは確かに確かに親鸞聖人様がお待ちになっいて下さることは間違いのないことであります。

如来様のお浄土「西岸」には、初めて人間世界でわが名を呼んでくれた両親もまた「善友(ぜんぬ)」として待ち設けていて下さることもまた間違いのないことであります。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、合掌

|   |
|---|
| 正覚寺前住・前坊守お骨収め出立ちの法要 十月十四日夜七時半                   |
| 正覚寺報恩講 十月二十四日(土)お逮夜~二十五日(日)満日中                  |
| 正覚寺仏教壮年会例会 毎月第一日曜午後八時より                         |
| 正覚寺仏教婦人会例会 毎月十六日午後七時より                          |
| 著作編集兼発行元 りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)             |
| 〒520-0501 大津市北小松四五番地 ☎&Fax077-596-0166 住職 堅田 玄宥 |

<http://syohgakuji.web.fc2.com/> E-Mail:mhkatata@pluto.dti.ne.jp

## りびんぐらいぶず 平成二十一(二〇〇九)年十一月第二号

### 浄土にてかならずまぢまゐらせ候べし

弥陀の本願と申すは、名号をとなへんものをば極楽へ迎へんと誓はせたまひたるを、ふかく信じてとなふるがめでたきことにて候ふなり、

信心ありとも、名号をとなへざらんは詮なく候ふ、

また一向名号をとなふとも、信心あさくは往生しがたく候ふ、

されば、念仏往生とふかく信じて、しかも名号をとなへんずるは、疑なき報土の往生にてあるべく候ふなり、 …(中略)…

この身は、いまは、としきはまりて候へば、さだめてさきだちて往生し候はんずれば、浄土にてかならずかならずまぢまゐらせ候べし、あなかしこ、あなかしこ、

(Ref『末灯抄第十二通(親鸞聖人御消息第二十六通)』註釈版聖典P七八五)

#### 一、野鳥の結縁

秋も深まったある日の夕刻のことです。

玄関の前に雀を大きくしたような愛くるしい目をした一羽の鳥がじっとしているではありませんか。近づいても逃げようとしません。

野良猫が来るといけないので、玄関をあけるとトントンと中に入ってしまった。米粒を与えてももう受けつけません。中庭に放してやろうとしても身を人間の手にはゆだねません。

夕食後に郵便屋さんが来て帰った後、「横になっているようだ」との坊守の声に来て見てみると、すでに息絶えて横たわっているのです。

それは、わずかな時間の出会いであったにも関わらず、人間ではなく野鳥の旅立ちであるにも関わらず、私は、つい先ごろ、母親を送ったときと変わらぬ厳粛な思いで一杯になるのです。

リビングライブズー平成二十一年十一月第二号「浄土にてかならずまぢまゐらせ候べし」

あくる朝、中庭に穴を掘り亡骸を葬ったのであります。

さぞかし自由にあちこちの空を飛びまわったであろうその生涯の最期に縁あってお寺に飛び込んだ一羽の野鳥が、朝夕お念仏の声の聞こえるお寺の玄関で生涯を終え、中庭に葬られたことを不思議に思いました。

そのご縁によって、さぞかし、次の世は、お念仏を阿弥陀如来のお喚び声と頂戴して呼び覚まされる人間界に生まれて来るであろうことかゆかしく感じたことであります。

#### 二、わが名を呼んで下さる機縁

来る十月十二日から十六日までは、大谷本廟での親鸞聖人七百五十回大遠忌法要がお勤まりになります。

そのご縁に遇わせて、三年前に往生した前住と少し早いのですが、今年五月に往いた前坊守のお骨収めを十五日に執り行うことにしました。

そこでその前日は、「出立ちの法要」をご門徒お同行の皆さまと共にお正信偈によりお勤めさせて戴くことになったのです。

**法要は、多忙で自らの往くべき世界を見失っている私たち凡夫がひとしきり如来様のご尊前にぬかづいて、真実の世界に眼を開かれ、如来様のお喚び声に呼び覚まされる大切な営みであります。**

先の十月第一号に「お名号を聞くとは」でそのお心を頂戴しました。

人間界に呱呱の声を上げて生を得た私に対して、わが名を命名し、わが名を呼び続け「よばふ」てくれた両親があったことであります。

やがて、そのよびごえがわが名を呼んでいてくれるよびごえであると知る時が来て、私は人間界に迎え入れられ、爾来、一人前の人間として長じるまでにお育てに与ったことであります。

それから…

平成二十一年十月十二日初版発行、二十一年十月二十一日 五四訂版 1

何十年かの年月が流れて、その人間界には、南無阿弥陀仏と称えれば聞こえてくださる阿弥陀如来のお喚び声に呼び覚まされる道が開かれてあるのだとお育てに与かるのであります。

「ついにそのときが来て」の「そのとき」というのは、如来様の仰せを仰せと疑いなく頂戴できる瞬間だということで、これを信心を頂戴する時剋(じこく)の極まりだというのであります。

如来様の仰せを仰せと頂戴できる瞬間、私は如来様の大きな体内(タターガタガルバ)に宿され、いつの日か必ずや如来様の世界に迎え入れられる胎児としてお育てに与ることになるのであります。

### 三、ご讃題は、念仏往生のお心を表わして下さる

ご讃題は、未灯抄第十二通(親鸞聖人御消息第二十六通であります。「浄土にてかならずかならずまぢまゐらせ候べし」というのはお弟子様に宛てられた親鸞聖人その人の肉声であります。なんとありがたいことでしょう。

このお手紙は、有阿弥陀仏というお弟子様からの質問(当時の関東教団で、「念仏往生ではお浄土の真ん中に生まれることはできないのでは」と疑う異説が巻き起ったことから、直接親鸞聖人にお手紙で不審を問い尋ねられたもの)に、親鸞聖人がお答えになったものであります。

お手紙では「念仏往生を否定することの誤りをただし、信心と念仏が決して離れて存在するものではない(行信不離)関係にあること」を分かりやすく解き明かして下さっているのであります。

その結びで、自らは「年齢も極まっていることであるからして、きっと先にお浄土に往生することであろう」、そのときは「浄土にてかならずかならずまぢまゐらせ候べし」とおっしゃっていて下さるのであります。

何と心強い何と人間味豊かな温かいお言葉でありましょうや。

お釈迦様が阿弥陀如来のご本願が今や成就されたことをお説き下さった仏説無量寿経下巻の本願成就文のお心については、親鸞聖人ご自身が一念多念証文でやさしく説き述べて下さることは既に何度もご紹介させて戴きました。

その御文を拝読いたしますと、親鸞聖人は

本願の名号をきくとのたまへるなり。

きくといふは、信心をあらわす御のりなり。

とあるごとく、親鸞聖人ご自身が、如来様の直説じきせつに聞き入っていらっしゃる事が分かるのであります。

ですから親鸞聖人のお言葉というのは、聖人自ら如来様のお言葉を聞き受けられたその体験に根差したお言葉であるといわねばなりません。

それゆえ、とんしんにが貪瞋二河のわが身の本当の姿を思い知らされて自力がスタリ、如来様の招喚しょうかんの勅命ちよくめいに呼び覚まされつつ浄土へと歩みゆく白道(びやくどう)のゴールでは確かに確かに親鸞聖人様がお待ちになって下さることは間違いのないことであります。

如来様のお浄土「西岸」には、初めて人間世界でわが名を呼んでくれた両親もまた「善友(ぜんぬ)」として待ち設けて下さることもまた間違いのないことであります。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、合掌

|  |
|--|
| 正覚寺前住・前坊守お骨収め出立ちの法要 十月十四日夜七時半<br>正覚寺報恩講 十月二十四日(土)お逮夜~二十五日(日)満日中<br>正覚寺仏教壮年会例会 毎月第一日曜午後八時より<br>正覚寺仏教婦人会例会 毎月十六日午後七時より<br>著作編集兼発行元 りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)<br>〒520-0501 大津市北小松四五番地 ☎&Fax077-596-0166 住職 堅田 玄宥 |
|--|

<http://syohgakuji.web.fc2.com/> E-Mail:mhkatata@pluto.dti.ne.jp